



ナエドコロ



大小様々な触手に覆われた一室の空間。

その中には裸で絡み合う二人の少女の姿があった。

触手に拘束され、目隠しをされた大きな少女。

彼女の魅力的な身体を執拗にまさぐる小さな少女。

熱気で蒸しかえり、汗だくな二人の身体だが、

その下半身は汗とは違うもので一際濡らし、音を立てる。





■あは、すごい溢れてる。これでもう21回目なのに。
そんなに気持ち良かったんだ？

■はあ、はあ……はあ、お、お願いお姉ちゃん……
もう耐えられないの……

■目隠しだけでいいから取らせて……お願いっ……！

■ええいいわ。ここまで頑張ったご褒美に
そのぐらいは許してあげる。



視界をふさがれ、大好きな姉を見れずに何度も中途半端にイカされていた妹。暗闇から開放されてその目で姉を見た途端、発散し損ねていた中途半端な性欲が一気に高まり押さええられなくなる。声を荒げて喘ぎ、指を動かされる度に身体は悦び潮を噴く。今自分が姉の玩具になっていると考えるだけで膣は濡れ、次々と湧き上がってくる性欲を吐き出しては楽しんでいた。



■私も、ん…イきたくなってきちゃった…。

■…！触るっ！私がしてあげるよ！

お姉ちゃんのおまんこ…！

■んーん。そのままでもいいわ。

でも、もちろんあなたには手伝ってもらってから安心して下さい。

そう告げると1本の長い触手が妹の顔に向けて伸びてくる。

んぶん!

知ってるでしょ？

私が相手の苦しんでる姿を見て興奮すること。

ーおん

ほら、もつと息ができないくらい喉奥まで挿えなさい。

あはっ♡そのまま

私がイクまでしゃぶり続けるのよ。

んぶん

姉がイクと同時に、啜っていた触手が射精をおこなった。
前触れもなく突然流れ込んでくる熱い精液。
粘々とした液体は思う様に飲み込めず、大量に噴き出した精液が
彼女の口から溢れ出して行く。
程なくして、狭い空間が生臭さで充滿していった。



驚いた？この触手は
私の魔力で動いているから、
私がいくと触手も射精するの……

私の愛液だと思って
全部飲み干すのよ。

妹の秘所を弄る姉の手に、潮噴きとは違う水の滴りを感じた。視線を落として見てみると、自分の手を伝いキラキラと金色の暖かい水が零れ落ちている。それを見た少女はゾクゾクと何かが湧き上がり、子供が子供をからかう様にして妹を煽った。



いつしか触手に囲まれた空間はサウナの様になる。暑く蒸しかえり、二人の身体から湧き出る汗が相手の汗と混ざり、大粒の汗となって垂れ落ちていく。責めていたはずの姉はたつた2度の絶頂で足がプルプルと振るえ、苦しそうに呼吸をしながらぐったりと妹の体にもたれ掛かった。



はぁはぁ……
転生したてだから……かな……はぁ
一回イッただけで
すごく疲れちゃう……

もう少し身体が大人になるの
待った方が良かったかも……

姉を喜ばせようとしたのか、自分の快樂のためだったのか……
妹の女を捨てた変態行為により、
興奮を抑えられなかった姉が3度目の絶頂を迎えた。
同時に、三度喉奥に注がれる大量の精液。
僅かに出来ていた呼吸の隙間も閉ざされ意識が朦朧とする妹だったが、
身体は悦び潮を噴き、全身を嬉しそうに弾ませていた。



■じゃーん！……って、うわあ……すっご……
■ふああっ！お姉ちゃんっこれすごいっ……！
んっ……！どうなってるの……これ……！

姉が準備をすると言いながら妹のクリトリスを刺激すると、
突如むくむくと大きく膨らみ、男根へと姿を変えていった。
そのあまりの逞しさに姉も驚き唾を飲んだ。



これは魔触虫の効果よ。
この触手も全部そうなんだけど、
面白そうな玩具になると思って
買ってきたの。

さっきまでは
これを生やす準備だったのよ。

お姉ちゃん……
クリトリス……
男根……

魔触虫と呼ばれる生物の力で妹にペニスを生やす事に成功した姉。当初はこれを利用して、妹をもっと苦しめて自分の性欲を満たし、優越感に浸ろうと考えていた。しかし自分の足ほど太く、骨のように硬い熱く脈打つ肉棒に恐怖したじろいでしょう。そんなことを妹に悟られる訳にはいかない姉は、その気持ちを押し殺して余裕のある態度を取り平静を装った。





小さな手で触れられただけでビクビクと反応してしまうペニスに
姉が唇をつけてきた。

あっ！

唇が触れた瞬間、妹の全身を電気が流れるようにして快楽が走った。
ペニスの付け根の辺りから尿意のようなものが押し寄せ、
我慢する間もなく、妹はそれを姉に向けてぶちまけた。

驚いてすぐに唇を離れた姉。
放たれた大量の精液は彼女の顔に飛び散り、男の匂いを撒き散らした。
その匂いに犯され興奮していく姉の顔は真っ赤に染まり、
甘い吐息が零れる。
少女の小さな身体がそれを欲しがったのか、
下半身がムズムズと疼き、じわりと濡れて滴りだした。





亀頭だけをしゃぶられ舐められるぎこちないフェラ。
気持ちが良いがお世辞にもうまいとは言えず、姉の経験の無さを感じた。
しかし大好きな姉が自分のために必死にしゃぶるその姿は愛おしく、
すぐに2度目の射精の瞬間が訪れた。

■お姉ちゃんっ……！イクっ、イクイクっ……！

■んふっ、ふちゅっ……ん、いいわ、出し——っ！



■あはっお姉ちゃん！もつと飲んでっ！私のミルクっつ！
あはっ

一頻り出し終えたはずのペニス再び射精を始めた。
落ちて着いたと安心していた姉に再び襲い掛かる精液は
すぐ口の中いっぱいになり隙間から溢れていく。

はーっはーっ！

ふー……ふー……

ケモノのように大量の精液を撒き散らしても、そのペニスは衰えることなくそびえ立ち、姉の口に突き刺さっていた。熱気と臭いでのぼせた姉は射精が終わったことにも気づかず、精液をこぼしながら遅しいペニスを咥え続けていた。



あ……おしっこの匂いがする……
お姉ちゃんの匂いだ♡

っ!?

おしっこ……
おしっこ……

気持ち良くて……
お姉ちゃんもいっぱい
イッちゃってたんね♡

潮と間違えてお漏らして
しちゃったんだね……♡

■お姉ちゃんまた出るよおっ！飲んでっ！
■やっっ——んぶううううっっ！

普段は決して姉に逆らわない妹がペニスの快楽に飲まれ
大好きな姉を便器のように扱い、

我慢する事も躊躇う事もなく精液を口の中へ流し込んだ。

辱められ苦しめられ、妹に遊ばれ悔しくてたまらない姉は
随ちそうになる意識の中でこの仕返しをしてやろうと企てた。

お姉ちゃん大好きっ！
大好きっっ……！



■これでよしっ……と。

妹がまた暴れないように、さっきよりもきつく地面に拘束させる。
寝かせた妹の股間からはいまだ衰えず遅しく反り返るペニス
天高くそびえ立っていた。
姉は期待と不安でドキドキと胸を鳴らし、
妹の上にまたがり恐る恐るそれに触れていった。



■ つんくー……！
■ あはっ

魚頭に自分のまんこをくつつけ、ゆつくりと体重をかけていく。
姉の綺麗な一本スジのまんこがぱくりと口を開いてペニスを咥えると、
まんこの感触を感じて、ペニスがビクビクと嬉しそうに弾んだ。
しかし、あまりにもサイズ違いのそれは穴を捕らえられず、
まんこ全体に擦られるようにして反り返っていた。



おまんこ！おまんこスゴイッ！
お姉ちゃんもっとうっ！
もっとうっ！奥まで……はあっ！
奥まで挿れさせてっ！

(こんなの、絶対に無理よ……挿ったとしても死ぬわよあ……)

初めから無理だとわかってた姉は、奥に刺さらない様にして
のしかかり、クネクネと腰を動かしペニスを刺激した。
■（このまま……んっ、おまんこの入り口だけで何度も何度も
イかせてあげるんだから……！おちんちんってイク度に
痛くなったりするんですよ……？あはっ、今のうちにせいぜい
楽しんでなさっ……っ！）



淫魔とも呼ばれる彼女達の種族。

繋がってはいないものの、膣に精液をぶっかけられた事により姉の身体が無意識に悦び始め、顔を真っ赤にして発情しました。

■はあ……はあ……ごめん、お姉ちゃん……もう無理だよ……

目的を忘れて自分も快楽に溺れそうになるも、

幾度も射精を行った妹が

辛そうな声で嘆くのを見て平静を取り戻した。

ダメよ……

このままっ……んっ

半端な快楽だけで何度も

何度も射精させて……

はあ

はあ

さつき私を弄んだ
お返しをしてあげるんだから。

おはは

あなたの性欲が苦痛に変わるまで、
犯してあげるっ……



余裕をかまし、優越感に浸っていた姉の身体を何かが掴む。

っ……え？

■もう我慢できないのっ……おちんちんもっど、もっどしようよ……！

掴まれた方を見ると、拘束したはずの妹の腕が自分の腕を握っていた。ゾット……すぐに身の危険を感じた姉だったが、

何をする間もなく小さな身体は引き寄せられ、一瞬で貫かれた。



お姉ちゃん！
お姉ちゃんお姉ちゃん！

お姉ちゃんのおまんこおおっ！

雌と雄による正しい交尾で姉と交わる妹。雌同士とは比べられない程気持ち良く、ペニスで膈内を擦り子宮を突く度に、心のどこかにあつたもどかしさが晴れていく。

一方、力任せでレベル違いの物を挿入された姉。

処女膜が破けた痛みなど感じさせないほどの激痛が走る。

それでも姉は歯を食いしばり、泣き叫びたい気持ちを押し殺して妹に負けたくない一身体で耐えて見せた。



射精の瞬間が訪れると、妹はペニスを上げてより強く姉を突いた。

早く姉の子宮に種を植えてつけて、自分の物にしたい。

そんな感情ばかりが湧き上がり、大好きな彼女を乱暴に犯し苦しめる。

■くるっ！来るよお姉ちゃんっ！

■おおっっ——！

そしてペニスを限界まで押し込むとそこで動きを止め

尋常ではない量の種を撒き散らした。



大好きな姉と交尾を行っている喜びが納まらない妹は、
大量の精液を姉の子宮に注ぎきる前に再び腰を突き動かします。

■おっ……！おぐっ……っ！

ペニスが膈内をえぐる度に、姉が苦しそうに濁った声を上げる。
きつとまんこが潰れる痛みで苦しんでいるに違いない……。

そうわかっていた妹だったが、姉を突く腰を止めようとはしなかった。



ごめんお姉ちゃん……！
ごめんねっ！
痛くて苦しいよねっ？

う……
うた……ん……ん……

キモチいいわよう……
ん……ん……ん……

あは♡そっだよね！
私ちだよお姉ちゃん！
気持ちよくてたまらないのっ！

ぐんぐん

ぐん

ぐん

今まで姉に使われることが何よりもの快樂だと思っていた。
しかし大好きな姉を自分の手で苦しめ滅茶苦茶にすることが
それ以上に気持ちが良いものだと思いついてしまった妹。
姉を突き上げ、喘ぎ声をあげさせる度にこの上ない幸福感が
胸の奥から湧き上がる。
自分が気持ち良くなればなるほど、姉は苦しんでくれる。



射精しながらも激しくペニスを動かされ、呼吸がうまく行えない。
遂には壊れた体が悲鳴を上げるようにして潮を噴き
姉の体力を奪っていく。

姉が潮を噴くと、ただでさえ狭くきつい膣内がさらに縮まり、
妹のペニスに干切れそうな痛みと快感が襲ってきた。



イッた！
お姉ちゃんがイッたよ！

ぐんぐんぐんぐん

おちんちんぎれちゃうっ！

おちんちんがイッたよ！

いくら射精しても終わりの見えてこない交尾。

お腹はち切れそうなほど膨らみ、下半身は痺れて感覚が無くなる。気持ち良くも無いのに潮を噴き、おしっこが漏れる。

転生したての小さな身体と精神はボロボロに壊れ、

遂に意地を張っていた姉が恐怖に負けて

泣きながら妹に助けを求めるのだった。



姉の泣き言を初めて聞いた妹。

その普段は見せない弱弱しさがさらに性欲をかき立て、もっと泣かせてやろうとペニスを子宮に叩きつける。

糸が切れてしまい、もう我慢の出来ない姉は

止まるどころか激しさを増すばかりの行為に脅え、涙を飛ばしながらただただ苦しみ泣き喚いた。

わたしの負けだからっ！
負けでいいからっ！



■おねえちゃんおねえちゃんおねえちゃんおねえちゃん！
イクよおねえちゃん！イクツツツ・・・！

少しの性欲も残さないよう、全力で姉を使ってペニスをシゴいた妹。
最後は子宮をえぐって突き上げ、そのまま直接中で射精を始めた。
泣き喚いていた姉はいつの間にか静かになり、
子宮に精液を注がれても
ぐったりと力の抜けた身体をビクビクと弾ませるだけだった。



それから数時間、目を覚ましてから

抵抗しなくなった姉と抱き合いながら交尾を続けている妹。

姉のお尻を挿んでゆっくりと上下に動かし、じっくり膣内を堪能する。

数時間もの間一度も抜かれることなく挿さり続けるペニスにより、

姉の下半身は痛みも理解できないほどにマヒして壊れていた。





目は霞んで意識もハッキリしない姉だったが、聞こえてくる妹の命令には身体が反応し、無意識に従っていた。妹は人形やペットを扱っているかの様にして姉を褒めると、ご褒美の精液を子宮に注いであげた。

子宮に精液を注ぎ終えると、姉が苦しそうに深い呼吸をする。
ガクガクと身体は痙攣し、目が上を向く。

■お姉ちゃんどうしたの……？

さっきから全然声聞かせてくれない……気持ち良くないの？

姉の声が聞けず、気持ちは良いが物足りない妹。

姉の舌にしゃぶりつきお尻を優しく撫でて物足りなさを紛らわす。



■ そうだお姉ちゃん、こっちの穴も使おうよ。
っ——！

ふと思いついた妹は姉のお尻を驚つかみにすると大きく広げた。
空気がお尻の中に触れて驚き、穴を閉めようとする。

■ お姉ちゃんいつも恥ずかしがってこっちの穴は
舐めさせてくれないよね。こんなに綺麗でおいしそうなのに……。



■ 指じゃ物足りないもんね……。腕にしようか？
■ んっ……んっ！

人形の着せ替えを楽しむかのようにして入れる物を考え、
一つ一つの提案に替えて怖がる姉の表情を楽しんだ妹は
初めから決めていた物を動かし、姉のお尻の穴目掛けて突き刺した。



初めてお尻の穴を交尾に使われ、裂けそうな痛みに加えて
中をほじられる気持ちの悪い感覚に苦しめられる姉。

不規則に動く3本の触手は激しく姉の穴を出入りし、

反対側にいるペニスにゴリゴリと膈壁を押し付け刺激を与えた。

新しい刺激と姉の反応で気持ち良くなった妹は

無意識のうちに精液を漏らし、射精を行った。





自分の魔力で動いていたはずの触手がいつの間にか妹に乗っ取られ、お尻の穴を犯すのに利用されてしまう。
取り返そうにも力は入らず、
体力の尽きた姉にはなすすべが無かった。
■はあはあ……これ私がいけば……触手も射精するんだよね？
あはっ！イクよお姉ちゃん……！私のおまんこっ！イッチャうっ……！

■ あっ……！ ああっ……っ！

射精を終えた触手が一本ずつ汚い音を出しながら抜けていく。全てが抜けると、姉が脅えた表情を見せながら身体を硬直させた。必死に触手が使った穴を閉じようとするが、大きく開いたその穴はヒクヒクと疼くだけで閉じることが出来ない。お腹はゴロゴロと鳴り出し、開いた肛門に空気が入る。お尻はすぐそこまで来ている存在に恐怖し、妹に助けを求めた。



どっしたのお姉ちゃん？
お尻の触手が抜けたのがそんなに寂しいの？

じゃあちゃんと言わなきゃ……
お尻の穴に栓を
してください。っ

早く……
早く……

お尻……
お尻……

必死に耐えて抑えようとしていた姉だったが
ゴポゴポと2、3滴お尻の穴から液体が零れ出した。

■もうだめっ………っあひっ………!

そして次の瞬間、お尻に出された精液が汚い音と共に

一斉に溢れて噴き出していった。

あまりの恥ずかしさに姉の顔は真っ赤に染まって行くが、

その開放感は心地が良く、辛そうだった表情は辛そうに緩んでいた。



あはっ！お姉ちゃんお尻で射精してる

こんな下品なお姉ちゃん
初めて見た……

お尻でお漏らし
気持ち良さそうだね、お姉ちゃん♡

お尻

お尻

お尻

姉の醜態を満喫した妹は、もう一度その姿を見て楽しもうと再びアナルに触手を詰め込み射精の準備をした。

きつと姉なら同じことをされると気付き

悔しそうな顔でこつちを睨んで抵抗してくるだろう。

そんな反応を期待していた妹だったが、姉は顔を伏せ、肩を震わす。

耐え切れない辱めにあい、我慢できずに泣いているのだった。

…ごめんねお姉ちゃん



下品とか、そんな心にも無いことしちゃった…ごめんね、許して…

姉の泣く姿を見て心が痛くなり、自分まで悲しくなってくる。
嫌われたくない妹は何度も謝るが

姉はそっぽを向き、自分と目を合わせようとはしてくれなかった。

■ あっ——ごめんお姉ちゃん、またイツちゃった……。

っ——

その子供じみた反応が愛おしく、妹は再びまんこで達した。



抜かれるどころかどんどん奥へと侵入していく触手は直腸にまで突き刺さり、その奥で蛇口から出る水の如く射精を行い彼女の体内に精液を詰め込んでいった。

■やめっ……！おっ……！おあっ！

どんどんと登つて来る精液は少女の小さな体を一瞬で制覇し、喉という細い通路で我先にと道を奪い合いながら、顔の穴という穴から噴き出し飛び出していった。



射精はいつまでも続き、止まらない嘔吐は呼吸を困難にさせる。死にそんな思いをする姉の脳裏に走馬灯のようなものが流れ、今、自分がさされている辱めや苦痛を、過去妹にしてきたのを思い出した。自分がどれだけ酷いことをしていたのか身をもって体験し、これが妹による自分への復習なんだと感じた姉は心から今までの行為を反省して謝りだした。



■見て・・・お姉ちゃん・・・

妹は口を開け、姉の吐いた精液を口で受け止めていたのを見せつけた。そして姉の口や鼻から垂れる残った精液も舐め取り、ゴクリと飲み込んだ。

■私はお姉ちゃんに命令されなくなっちゃってこんなことするんだよ？
だって、お姉ちゃんのことを本当に大好きなんだもん・・・。
だから謝らないで・・・。



私こそごめんね？
お姉ちゃんと本当のえっちが出来るのが
とっても嬉しくて・・・興奮しすぎてた・・・

湧き出る性欲を全て発散した妹は平静を取り戻し、
生えていたペニスも徐々に小さくしぼみ、終わりの時がやってきた。
■大好きだよ…お姉ちゃん…。

妹の自分への愛が本物だと知り、

苦しみから解放される喜びも相まって幸せな気持ちになった姉。

疲れ果てた姉妹はそのまま仲良く抱き合い、

気を失いながら眠りについた。





それから僅かな日が立ち——先日の交尾で多くの魔力を消費し
疲労した姉妹は、しばらくの間眠りにつくことにした。
二人でいると発情するという理由から、別々の部屋で休息を取る。
あれ以来二人の中は進展し、変わらない日々が続きつつも
姉は妹を道具として見ることはなくなり、
互いを気持ち良くさせるために体を重ね合うようになっていた。
ペニスを生やした魔触虫も、あれ以来使用することはなかった…。



一人静かに眠る妹。
その周りを、何処からか集まってきた
大小さまざまな触手が取り囲み、彼女を拘束した。
触手の動きはどこか淫猥で、彼女の魅力的な身体を執拗に撫で回し、
触手を押し付けて感触を楽しみだした。



人型の雌の生殖器が何処に付いているかを理解しているのか、
1本の触手が迷うことなく少女の割れ目に伸びていく。
吸い付くようにくっつく、そのままゆっくりとスジをなぞった。
性欲に敏感な淫魔の身体はすぐに反応し始め、
甘い吐息を漏らしながら下半身をジワジワと濡らしていく。



陥没気味の乳首に入り込み、
ほじくりこねていた触手がそのまま中で射精をする。
乳首から母乳のように噴き出る精液は辺りに飛び散り、
その独特な臭いで少女の鼻を刺激した。
射精を終えた触手が乳首から抜抜け出ると、
大きく勃起した乳首の先っぽが引っ張られるようにして顔を出した。



眠りながらも敏感に反応して火照った身体は、
秘部をたつぷり濡らしながら、次の刺激を求めてヒクヒクと疼いていた。
覆っていた薄い布は剥がされ、
物欲しそうによだれを垂らす少女の割れ目が露わになる。
目を閉じ寝息を立てる少女だが、
胸はドキドキと鼓動を早くし、何かを期待しているようだった。



■ んっ……！
柔軟な触手が身体に巻きつき、濡れた割れ目を挿んで広げた。
いつもより豪快にまんこを開かれびくりと驚く。
実は射精されたのをきっかけに、すでに目を覚ましていた妹。
彼女はすぐにこれが姉による悪戯だとわかり、
あえて寝たふりを続けて楽しませてあげようとしていたのだった。

開かれたそこに何をされるのか楽しみに待ち構えていた妹だが、触手は突然乳首に噛み付き、

豊富な胸を押し潰しながら強く吸い付いた。

触手の中では無数の小さな触手が勃起した乳首の先端を舐め回し、

激しい吸引を行って乳首を吸い上げる。

ビリビリと体に電気が走り、激しい快楽に襲われた妹は

開かれたまんこから噴水のような豪快な潮を噴いてイッてしまった。





■お姉ちゃんもう待てない...早くおまんこ...!
おまんこ弄って、お姉ちゃ...あえ?
もう我慢ができなくなった妹は寝たふりをやめ、
目を開けて姉を欲しがった。
しかし、側にいると思っていた姉の姿がどこにも見当たらない。
代わりに無数の触手が自分を囲み、矛先を向けてうねっていた。

周囲を全て見渡すよりも先に、
下半身で構えていたひと際太い触手が少女の中へ突き挿さる。
発情して濡れたまんこはすんなりと挿入を許し、
狭い膈内を広げながら止まることなく子宮にまで到着した。
ゴツンと鈍い音が少女にだけ聞こえ、ビクリと身体を跳ねさせた。





挿入された触手はむくむくと膨らみだすと、
膈内を楽しむことなくすぐに射精を始めた。
姉に色々な物を挿入されたことはあるが、
精液を流し込まれる
本物の交尾を今初めて体験する妹。
突然膈内で何かが弾け飛んだかと思うと、
溶けるような熱さと共に
広がっていく。納まりきらないそれが
結合部から噴き出した時、
妹は初めて射精されたことに気がついた。



射精を終えると今度は激しく前後に動き、交尾を始めた。腔内に溜まった精液をかき回され、膣壁に塗られたくられる。淫魔の身体は初めて本物の交尾を体験でき、激しく乱暴に犯されながらも嬉しそうに触手を啜っていた。辺りを改めて見渡しても姉の姿はなく、触手たちが自らの意志で動き、襲われているのだと妹は気付いた。



姉を裏切りたくない一心で快感を感じないように我慢して耐える妹。素直にならず拒む少女の元に、1本の新しい触手が伸びてきた。それは大きく勃起した彼女のクリトリスに絡みつぎ、やさしく舐めるようにして擦り始める。敏感な部位をさらに攻められ、一瞬その快感に負けそうになる妹は甘い声を漏らして反応してしまった。



しかしそれも束の間、やさしく触れていた触手は次の瞬間にはクリトリスに噛み付き、千切れそうな痛みが少女を襲った。乳首と同じように激しい吸引をしながら、食いちぎるような勢いでぶんぶんと触手が揺れ動き、振り回される。強烈な刺激に襲われ、驚く身体は潮を噴き出しガクガクと悶えた。



剥き出しのクリトリスから伝わる快楽を超えた痛みに、
幾度も絶頂を繰り返しておしつこのように潮を噴き続ける。
悶絶する少女を見て楽しそうにうねる触手たち。
満足した触手が順番に射精を始め、
少女に追い討ちをかけていった。



膣内でも射精が始まりいよいよ意識が遠のいていく。
2度目の射精は、1度経験したことからそれが精液だとすぐに気付き、
種を植え付けられていると考えるだけで身体が興奮していった。
このまま堕ちて快楽を楽しみたい……。
そう何度も思う少女だったが、
頭の中で姉のことが浮かび上がり、踏みとどませた。

飛び散った精液や自分の噴いた潮に埋もれていく少女。
触手は射精しても止まることなく動き、
少女の敏感な部位を攻め続けた。
今にも飲み込まれそうになる気持ちの良い快樂に、
姉の顔を浮かべて何とか抵抗する妹。
姉との行為よりも気持ちが良いと認めるのは、
大好きな姉への裏切りだと感じて絶対に許せなかった。





そんな気持ちを知ってか知らずか、
頑なに快楽を受け入れようとしないうる少女に対して、これでもかと、
5本、6本と触手をお尻の穴目掛けて突っ込んだ。
下半身の二つの穴はくっついてしまいそうなほど大きく開き、
少女に息苦しさを与えながら
競い合うようにして出入りを繰り返す。



息は詰まり、お尻は裂けそうな痛みを感じる。
耐え難い苦しみは少女の快楽となり、
犯されているという行為をより強く感じさせられ、
少女は興奮した。

ここまで姉を思い必死に耐えてきた妹だったが、
目は霞んでいき、その奥にいた姉の姿も見えなくなっていった。



■お姉ちゃん！お姉ちゃんごめんなさいっ……！ごめんなさいっつ！
これすごいっ！気持ちイイのおおおおおっ！
遂に限界を迎えた少女。
我慢するのをやめた途端、その快楽に引きずられ呑み込まれて行く。
苦痛で歪んでいた顔はすぐにとろけ、
快楽を全身で感じ、潮を噴く気持ち良さを満喫した。



やっと我慢することなく中出しを堪能でき、子宮に精液が入っていくのを感じて身体が満たされていく。お尻を犯していた触手たちも一斉に射精を始め、お腹が精液で一杯になるのを苦しみながら満喫し、少女はその雌だけが味わえる至高の快楽を楽しんだ。



射精が終わるころには元氣よく喘いでいた少女も静かになり、口から泡を噴きながら一生懸命に呼吸をしていた。予想以上の快樂の連続に付いて行けず、意識が朦朧とする。今の少女の姿は捕食をされている獲物のようで、グネグネと動く触手に引つ張られて身体を動かし、一際強い刺激が来る度に、擦れた声を漏らして鳴いていた。



息つく暇なく再び少女に新しい精液が注ぎ込まれる。
体力が無くなり弱っていた少女だったが、
その味を覚えた身体は射精を悦び、流れ込んでくる種をもっと奥で
受け止めようと自ら身体を突き出し硬直させる。
しかし、気持の良い中出しはいつまでも長く続き、
それは逆に少女の顔色を変えていった……。



一度流れ込んだ精液を止めることなど少女には出来ず、
大量に流れ込み喉にまで登ってきた精液が口から噴き出した。
それは先日の姉との交尾で、少女が姉に対して行った行為そのもの。
少女は気がついていないが、
何かの理由である行為を学習していた触手が真似をしていた。
触手は射精を途切れなく行い、精液を吐かせ続けた。

射精し尽くした触手たちが少女の穴から次々に抜けていく。
イキ狂った少女は開放された穴に寂しさを感じながら余韻に浸った。
そんな彼女のクリトリスに嘔み付き離そうとしない触手が、
とても小さな針でプスリと刺さし、何かを注入した。
そしてゆっくと擦りながら、
注入したそれをクリトリスに馴染ませていく。





軽い刺激を楽しんでいた少女だったが、それはいつの間にか強烈な刺激に変わり、気付くと触手に啜えられた中でクリトリスが膨張して膨らみ形を変えていた。下半身に伝わる違和感と、そこから感じる快楽に覚えのある少女。同時に性欲が湧き上がり、冷めやらない興奮が少女を狂わせる。



妹が襲われると同じ頃、姉の眠る周囲にも触手が集まり
彼女を囲んでを拘束していった。
何も知らない少女は気持ち良さそうに寝息を立て
ぐっすりと眠っている。



疲れを溜めて寝ている少女に向けて
何度も射精を繰り返し、精液を顔にかけていった触手たち。
こんな小さな身体の少女でも下半身は濡れていき、
妹と同様に反応し始めていた。



寝苦しさで目を覚ました姉だが、
寝ぼけている彼女は自分が拘束されていることにも気が付かず、
いつもと違う風景に違和感を感じながらも
ウトウトと重たいまぶたを下ろして再び眠りに就こうとした。

目を閉じると同時に、突然下半身に痛みが走った。
驚いた少女はとっさに足を閉じようとするが動かせず、
股の間に手を持っていかうとしても、腕も動かなかった。
慌てて目を開け再び周囲を見渡し現状を確認すると、
触手の群れに囲まれ拘束されていることにやっと気が付いた。





痛みのする下半身に目を向けると、おへソの下辺りが
不自然に膨らんでいるのが見え、
少女は痛みの原因を理解した。
周囲から漂う異臭にも気が付き、顔をしかめる。
■ なによ……これ……

理由はわからないが魔食虫が勝手に動いて襲ってきている。
一刻も早く抜け出そうとするのだが、
挿入された触手は先端で子宮口をこじ開け侵入すると、
動くことなく射精を始めた。
驚いて暴れ出した少女をベッドに押さえつけ、
着実に中出しを済ませていった。





■な、なに……たったそれだけ？ふん、大したことないわね……！
先日のと比べると一回りも二回りも小さなサイズの触手。
射精の量も少なくなるとか耐えられた少女は余裕を見せる。
しかし、治癒魔法も使え再生力のある彼女の身体は、
妹に散々使われてしまった下半身を元の状態に戻していた。
さらに彼女の小さな身体にとってはその細身の触手ですら十分に太く、
やせ我慢をして反抗しているのだった。



■（このぐらいなら集中して魔力さえ溜めれば勝て……え？）
反撃しようとした姉だったが、自分と繋がっている触手の一部が
異様に膨らんでいるのを見つけた。
それはモコモコと一部だけを大きく膨らませながら、
こっちに向かって進んできているのがわかった。
そのまま進むとどうなるか、少女はまだ理解できていなかった。



止まることなく進んでいく膨らみは少女の割れ目に顔をつけると力強く穴を潰しながら押し込まれた。

小さな穴は膨みの四分の一ほどで限界を迎えるが触手は容赦なく押し進め、膨らみの真ん中まで入ったところで少女のお腹の中に勢いよく吸い込まれていき、先端から吐き出された。体内で吐き出されたそれは大きくお腹を孕ませ、存在を主張した。

■ひっ……うっ……っ……!

得体の知れない物を体内に入れられ、少女は脅える。

下半身は裂け、お腹が破裂しそうな痛みに苦しみ悶えた。

出されたそれは精液よりも熱く重たく、

どこか生き物のようにも感じられたが、

それが何なのかを知るのが怖くなった少女は、考えることをやめた。



苦しむ少女の目に、再び触手が膨らみ始めたのが見えた。

「さっさと血の気が引き、必死に拘束する触手を解こうと暴れだす。動き出したそれは止める事などできずに、どんどん向かってくる。」

「近づく絶望に恐怖を感じ、奮えて泣き出した少女。」

「触手を強く握りしめて助けを求めるが、願いは叶わなかった。」

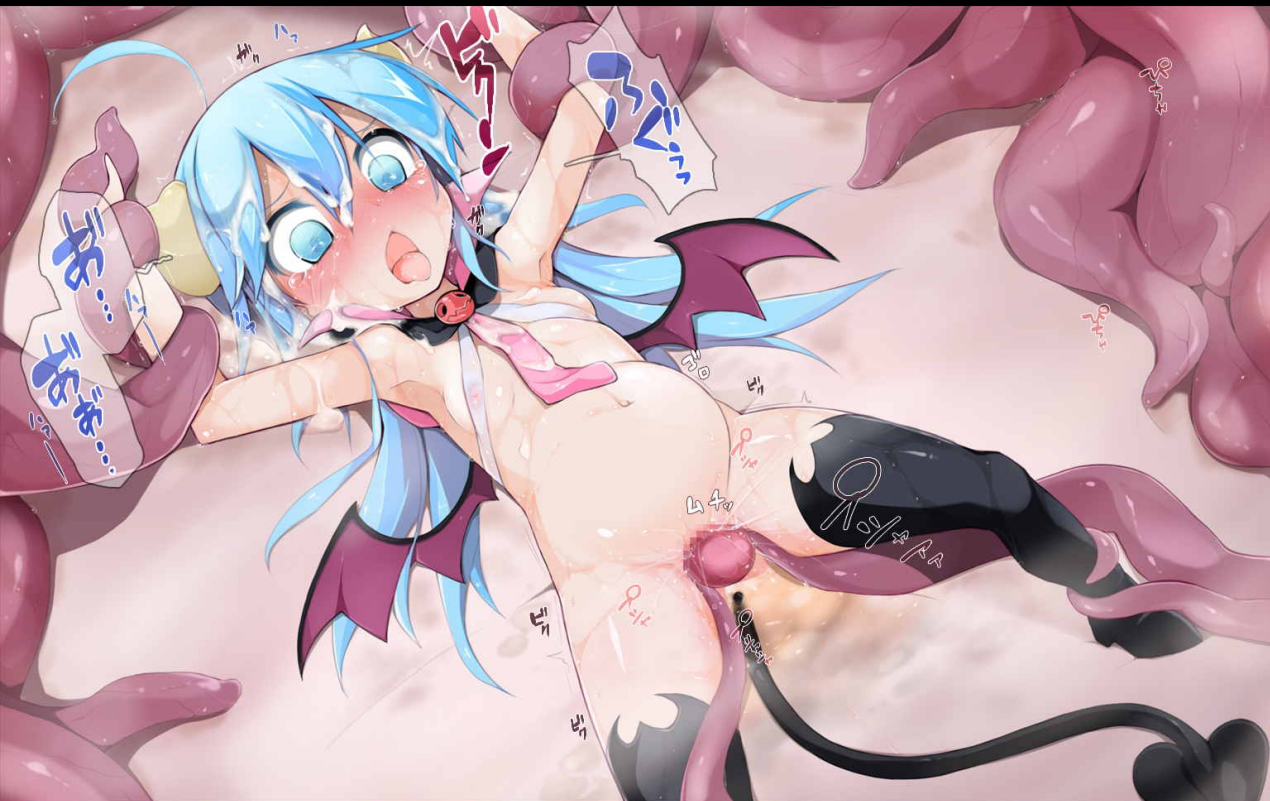




再び体内にモノを詰め込まれ、声を失って苦しむ少女。
今度は二度…三度と、容赦なく次々と子宮に詰められていく。
激しく痙攣しながら悶絶する少女のお腹は
血管が浮き出るほどパンパンに晴れ上がった。いった。



全てを詰め込み終えた触手は少女の穴から抜ける。
同時に少女が失禁し、白いシートが黄色く染まっていった。
穴という穴から水を噴き、ぴくぴくと力なく弾む。
死ぬほどの痛みはさすがの淫魔でも快樂と捕らえられず、
痛みと苦しみだけを存分に味わい瀕死に追いやられる。
そんな彼女の苦しみは、まだ始まったばかりだった……。



突然、大きく孕んだお腹の中のモノが動き、子宮から顔を出して抜け出そうとしはじめた。身体の中でうごめいてるのがわかり、少女は考えたくはなかったが、それが触手の赤ちゃんだと確信した。姉はその小さな身体で触手の子を産まされるのだった。



少女のお腹に出されたモノの正体は触手の卵の、卵。母体となった彼女の魔力を吸い取りながら成長し、立派に成熟した魔触虫の卵へと姿を変え、産まれようとしていた。しかし、少女の母体として適応してない身体では体外へ産み落とすことが出来ず、顔を出したままつかえてしまう。少女は鼻息を荒くし必死に出し切ろうとするが、下半身からあらゆる水を排出するばかりで、自力で産む事ができなかった。



見かねた触手が顔を出していた卵を掴み、一度少女の体内へと突き戻した。ビクンと一際大きく跳ねて潮を噴く少女。パンパンに張ったお腹に触手も追加され、その形をくつきりと浮き上がらせる。出産とは呼べないその拷問に、少女は泡を噴き生死を彷徨った。



なかなか卵を取り出すことが出来ず、少女の中で暴れる触手。
考えた触手は取り出しやすいように射精を行い、
卵の詰まった子宮を精液で埋めて滑りを良くさせた。
もうほとんど隙間のないお腹の中で始まる射精に、
少女は白目を向いて声を詰まらせる。



母体のことを一切考えない行為は成功し、
大きな音と共に少女の穴から脈打つ卵を抱えた触手が抜け出した。
大きく開けられた少女の穴からは精液が釣られて噴き出し、
止めどなく溢れシーツの上に溜まっていく。
出産に成功した姉は身体が切断されるような痛みを感じ、
自分が生きているのかさえわからない、瀕死の状態だった。



つかえていた一つの卵を取り出すと、その後はボコボコとスムーズに出産を終えていった。
大量の触手の卵が足元に転がり、
彼女の体液でできた染みだらけのシーツを隠す。
口から泡を噴きながら失神する姉は、
お腹の膨らみが無くなり、生きてる事を感じて心から安堵した。

■お姉ちゃん大丈夫……？

気を失う姉のもとに、妹がやってきた。

■あつ……あ……

微かに妹の声が聞こえ、意識が戻っていく。

その目で妹の姿を確認できた姉は、助かる喜びに涙を流した。

妹がなぜか自分の顔にまたがり、口に何かを押し付けてきたが……

それでも姉は助かると信じていた……。





瀕死の姉は妹の異変に気付かず、口に当てられたペニスの正体もわからず啜えてしまう。この状況においても妹に助けられると思いき安んじている姉に、妹は体重をかけて一気に喉の奥へとペニスを突き込んだ。妹は快楽に満ちた声を上げながら、溜まりに溜まっていた精液を姉の喉奥に直接流し込んだ。



■ あああつお姉ちゃん！お姉ちゃん！気持ち良いよお姉ちゃん！
いきり立ち抑えられない興奮がペニスから発せられ
一刻も早く姉で発散したかった妹。
姉の顔にのしかかると力任せに口の中へ詰め込み、根元まで啜えさせる。
何度も射精を繰り返し、さらに乱暴に交尾を続けた。
姉の口が馴染んでいくと、さらに乱暴に交尾を続けた。



先日のもどかしい姉のフェラや浅いまんこと違い、
喉奥を使った交尾はペニス全体を刺激でき、
余すことなく精液を搾り出せた。
太く長いペニスは喉奥を突き抜けて
直接胃に精液を流し込む勢いだった。



■あはっ！お姉ちゃんごめんね・・・気持ち良くて出過ぎちゃった・・・。
そのあまりの量と勢いに、射精が終わると姉は嘔吐を繰り返し返し
出されたばかりの新鮮な精液を吐き出した。
嘔吐することはできず、触手に拘束されたまま何一つ
抵抗することが出来ない彼女は、精液の海で溺れさせられる。



まだまだ出し切れない性欲。
お尻を姉の顔に叩きつけながら、ペニスを激しく出し入れし
溜まっていた精液を次々に発射していく。
突く度に姉とペニスの混じった音が聞こえ、妹を気持ち良くさせた。
■はぁっはぁっはぁっ！イクイクイクっ！イクよお姉ちゃんツツ！



■お姉ちゃんのおまんこだ……ああ……こっちでも良かったな……でも、ここ狭くておちんちん根元まで入らないんだもん……
ペニスを抜きながら、目の前にある姉のまんこを手馴れた手つきで愛撫し、ウツトリと見つめる妹。
吊るし上げられた下半身はびくびくと反応を始め、愛液が溢れ出る。



溺れて苦しむ姉の身体を潮を噴かせてイかせた妹。
■あは！お姉ちゃんがイッた！私も、私もイクよ、
一緒にっ…イクッっ！
自分も続いて射精を行い、
姉と一緒に気持ち良くなる快感を満喫する。



イキ終わった姉が続けざまにおしっこを漏らす。
それを見た妹は迷うことなく口を開け舌を出すと、
姉の漏らすおしっこを舐め取り飲んで行く。
■お姉ちゃんのおしっこ……漏らすなんてもったいないよおっ！
ちゃんと、ちゃんと口に出さなきゃ……！



■こうやって……全部飲ませなきゃ……んふうっ！
姉のおしっこに釣られて妹も尿意を感じ、放尿を始めた。
それはもちろん姉の喉奥で始まり、ジヨボジヨボと胃に溜まっていく。
絡みつく粘々とした精液を洗い流してキレイにしていくが、
その量は精液よりも多く大量に排出され、
入りきらない尿はすぐに口から溢れ出ていった。



■お姉ちゃん便器みたい……。私専用の便器……。
私のおちんちんだけが使っている、お姉ちゃん便器……。
姉を自分のモノとして考えるだけでソクソクと興奮が湧き上がる。
ペニスはさらに熱を帯びていき、膨張して姉の口に詰まっていた。



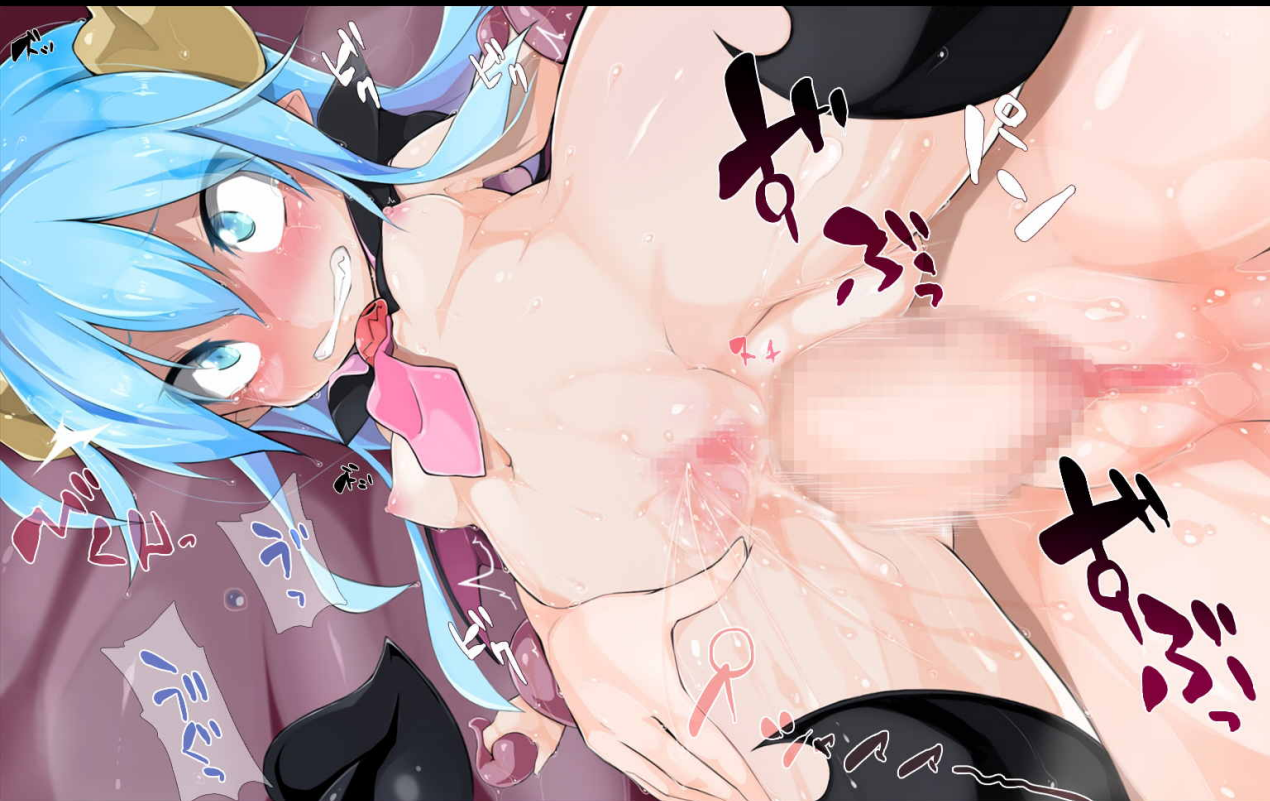
■はあっはあっはあっはあっはあっ！
吐き出しきれない興奮に、さらに激しく姉にペニスを叩きつける妹。
息ができず弱っていく姉は段々と反応が薄くなり、妹もそれを感じた。
■大丈夫だよお姉ちゃん！お姉ちゃん強いからっ！5分ぐらい
呼吸できなくなっただって生きられるよねっ！大丈夫だよ！
姉なら大丈夫だと自分に言い聞かせ、妹は息を荒立て姉の口と
交尾を続けた。

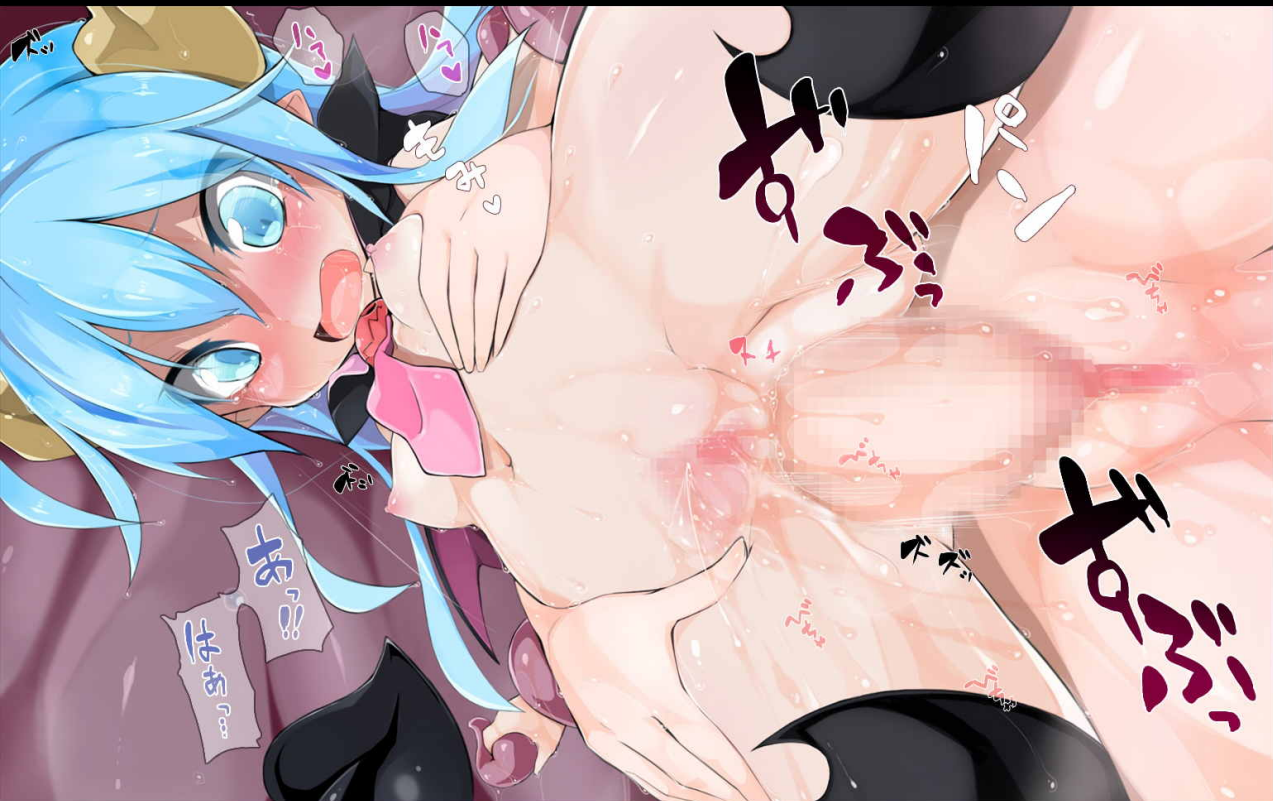


■イクイクイクイクッ！お姉ちゃんっ！これで最後だから！
全部飲んでっ飲んで！私のおちんぼミルクウウウウウッ！
射精が始まると大きな音を立てて姉の口から精液が噴き出した。
吊り上げられた下半身は激しい痙攣を繰り返し、潮を噴く。
15分近くの間延々と喉を犯され、
胃に精液やおしっこを注がれ続けた姉は早い段階で気を失い、
本物の便器のように役目をまっとうしていた…。

■ひぐうっっ！

妹に抱きかかえられた瀕死の姉は、
極太のペニスをお尻に一突きされ目を覚ます。
触手たちは妹の交尾をサポートするかのよう
に、
大の字で姉を拘束し捕らえていった。
お尻での交尾もまた気持ちが良い、妹は幸せそうに腰を打ち付けた。





■お姉ちゃん、相変わらずおっぱい大きいね。
お姉ちゃんの年齢でここまで膨らんでる子なんて、いないよ。
軽々と持ち上がる姉を後ろから犯しながら、
身体を隅々までまさぐり感触も楽しむ妹。
まだ発育途中の小さな胸を揉むと、
自然とペニスが反応していきり立ち、姉をさらに貫いた。

■お——っ……けふっ！

まだまだ出し足りないペニスはや々に射精をはじめ、姉の体内に精液を巡らせた。

出された精液を口から吐きそうになる姉だったが、少し勢いが足らず、吐き出す直前で詰まり空のえづきをした。



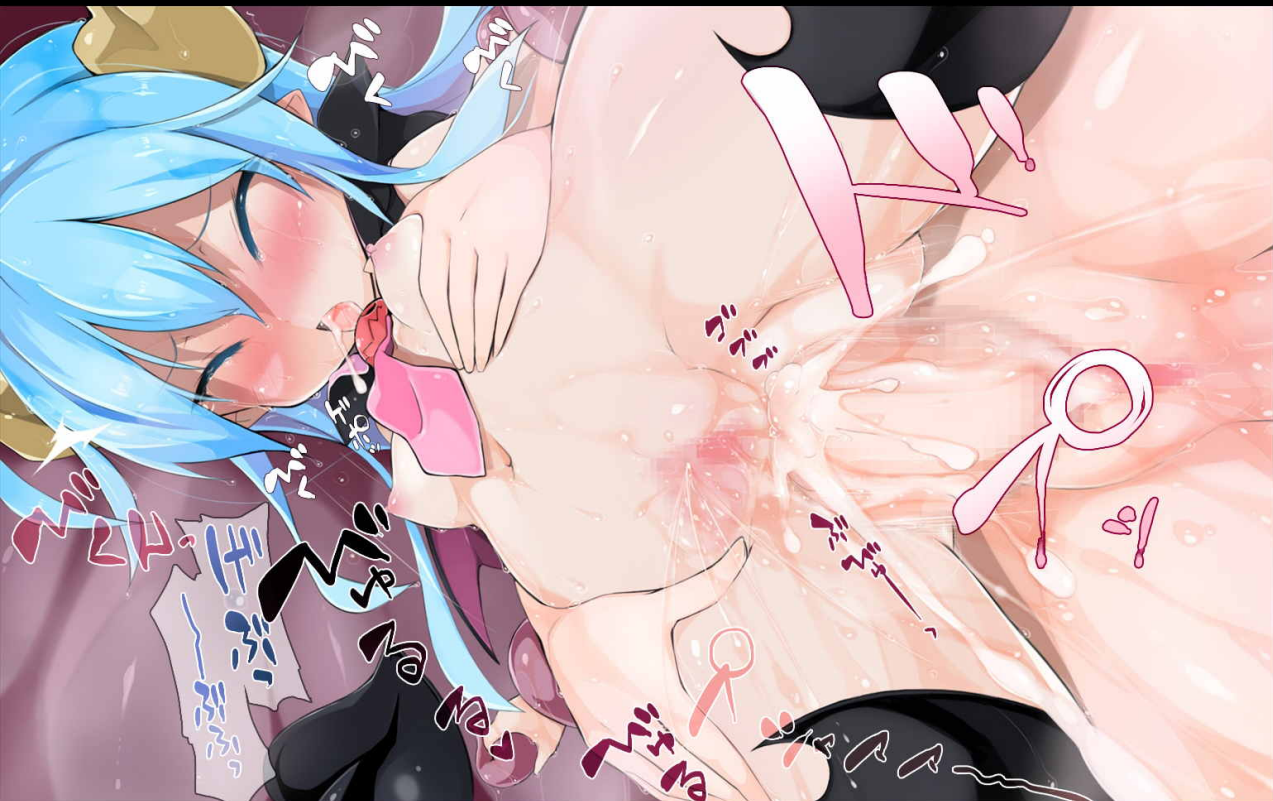


■ごめんねお姉ちゃん、中途半端が一番辛いよね。
次はちゃんと、お姉ちゃんの口まで精液届けるから！

■ やっ！だめっ、ヤダだからっ！止まっ……っ！イタイッ……！

1 発目が物足りなかった妹は突くペースを上げ、姉の小さなお尻に腰を叩きつけていく。

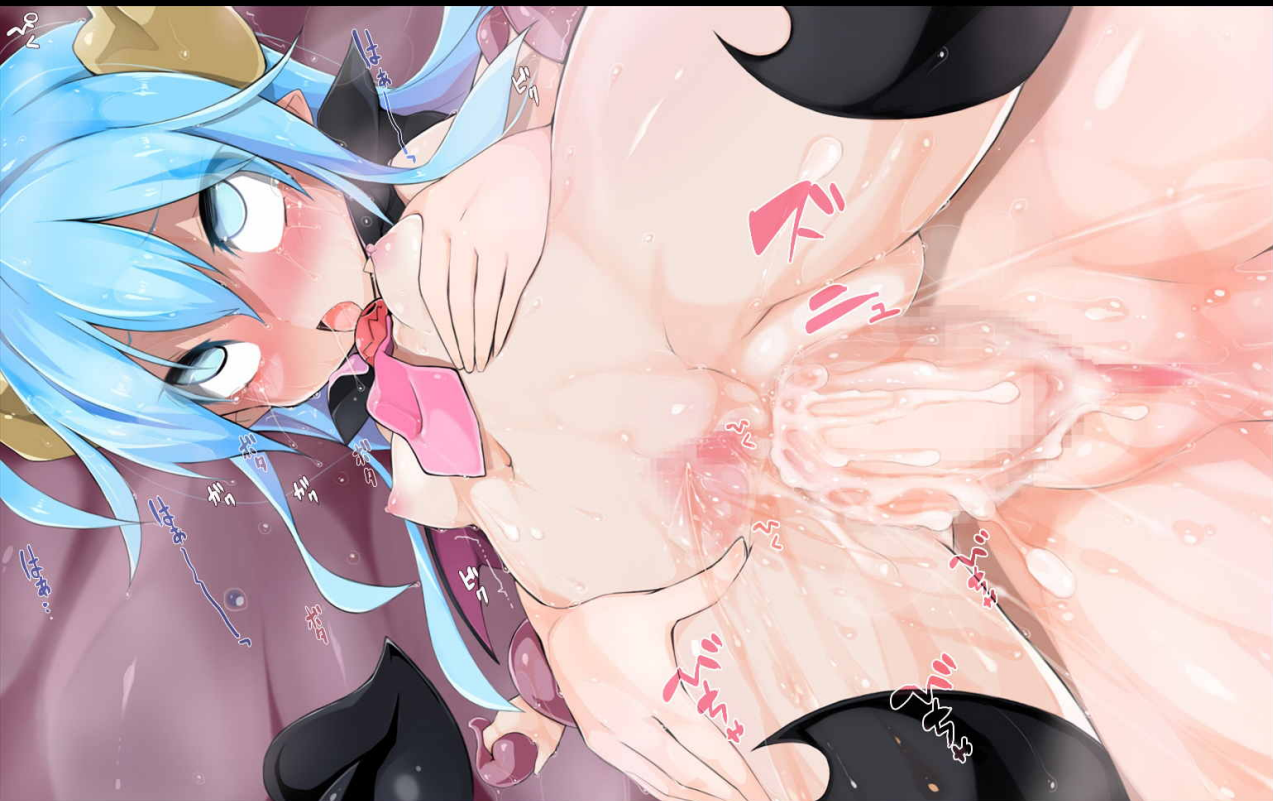
お尻の穴は太いペニスに合わせて広がり、裂ける痛みを苦しんだ。



再びお尻の中で射精が始まると、今度はしっかりと口まで届くように奥深くまでペニスを入れて腰をくっつけた。口を閉じて耐えていた姉だったが、すぐに喉まで迫ってきたそれは抑えることが出来ず、反射的に口を開けて吐き出した。

■お姉ちゃんが我慢したりするから、全然精液吐かせられなかったよ？
つ——あああつ！

思い通りに行かず、見てて楽しくない妹は
桜色の小さく勃起した姉の乳首を強く抓り泣かせる。
その行為はとても妹とは思えず、本当に悪夢を見ている気もしたが、
身体に走る痛みで現実だと教えられた。



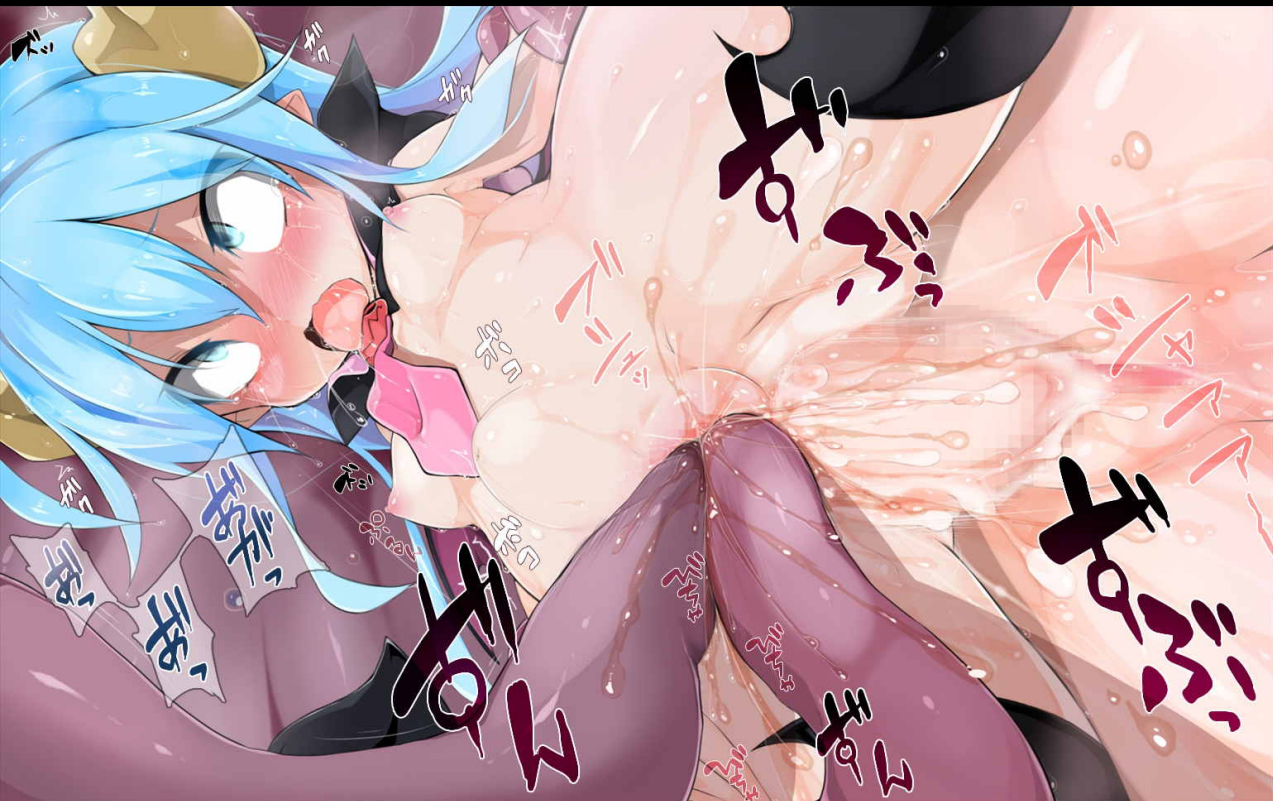


■ そうだ、我慢なんて出来ないようにしちゃえばいいんだ……。

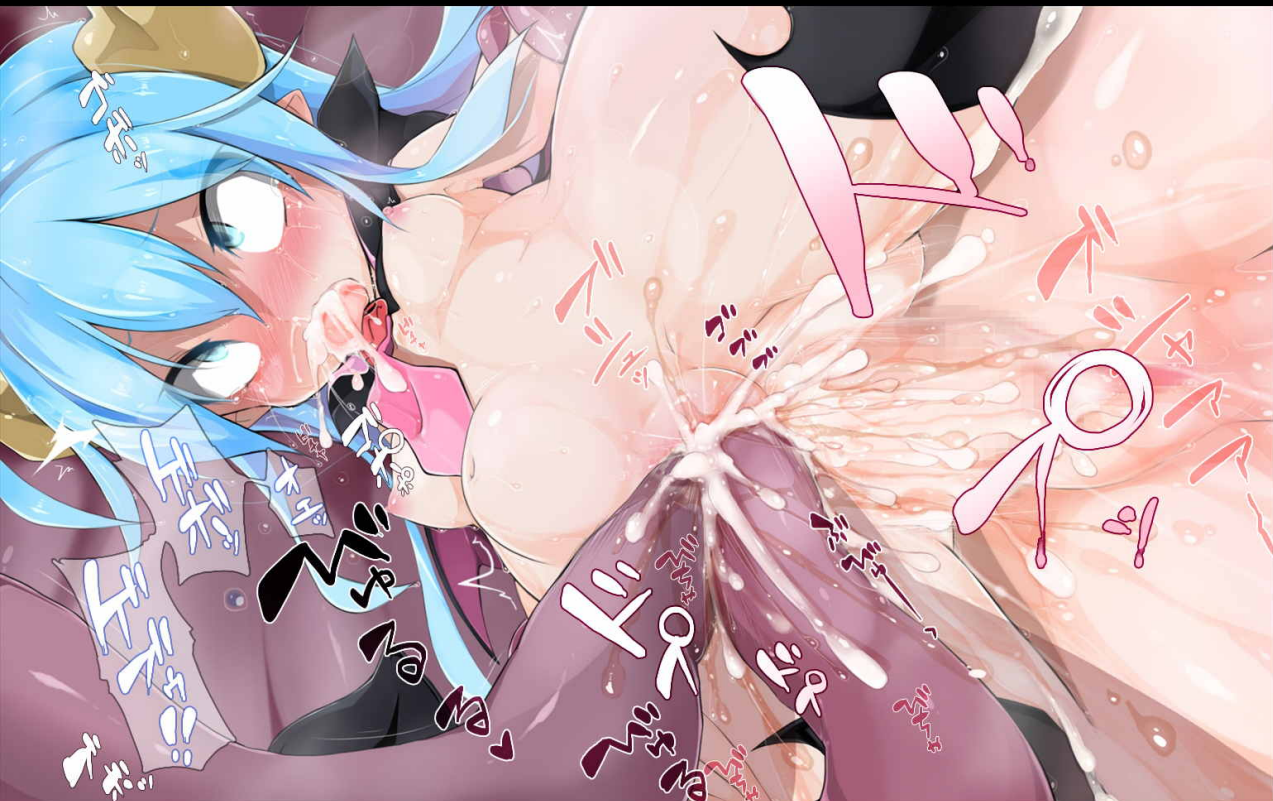
妹がそう呟くと、2本の触手が近寄り姉の前に構えた。

それが自分の身体に狙いをつけていることがすぐにわかった姉だが、自由が利かず拒むことも出来ないまま貫かれてしまう。

■ こうすればお姉ちゃん、苦しくて我慢なんて出来ないよね……♪



酷く乱暴に暴れながら膣内を犯す2本の触手は、手で掴んでドアを開けるように子宮口を開き、中へと侵入した。触手は交尾を目的とはせず、ただ彼女を苦しめるためだけに内側から子宮を何度も押し上げ、お腹を波立たせる。声が出せないほど苦しむ姉に変わり、下半身では大量の水を噴き、失禁を繰り返して泣いていた。

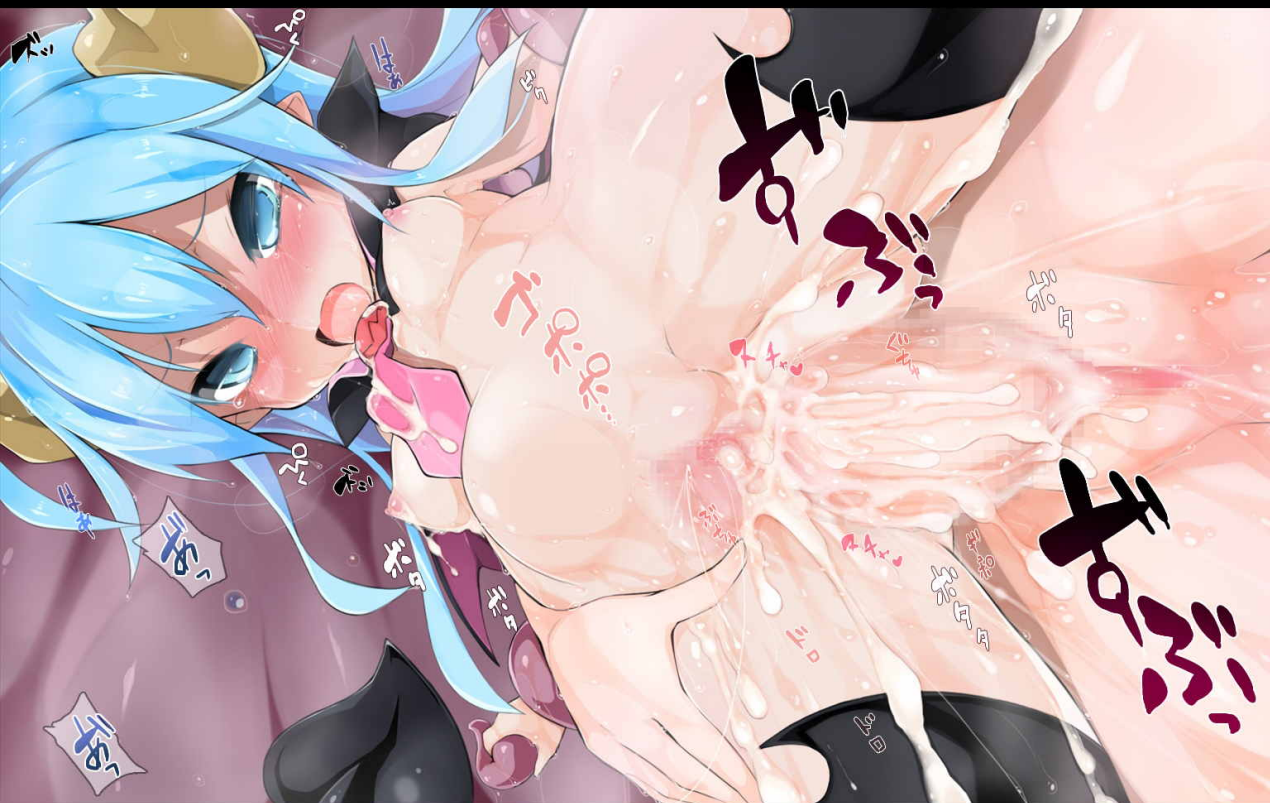


ここまでされても諦めずに
耐えようとしていた姉だったが、その気持ちはすぐに折られた。
口は反射的に開き、
妹の放った大量の精液が断続的に何発も噴き出し溢れていく。
妹はその姿を見て興奮を高め、何度も何度も射精を繰り返して
姉に嘔吐をさせて快楽を満たしていった。

■もうっ……！やめ、て……！ゆるしてっ！

目を覚ましてから休むことなく続く悪夢。

まだ心のどこかで妹に助けてもらえると淡い希望を抱き捨てきれなかった姉。しかし、性欲の捌け口として使われ苦しめられる内に、その願いは叶わないと悟ってしまふ。今後ろで犯しているのが本当に妹なのかどうなのかさえ、双子の姉である彼女にもわからなくなってしまった。



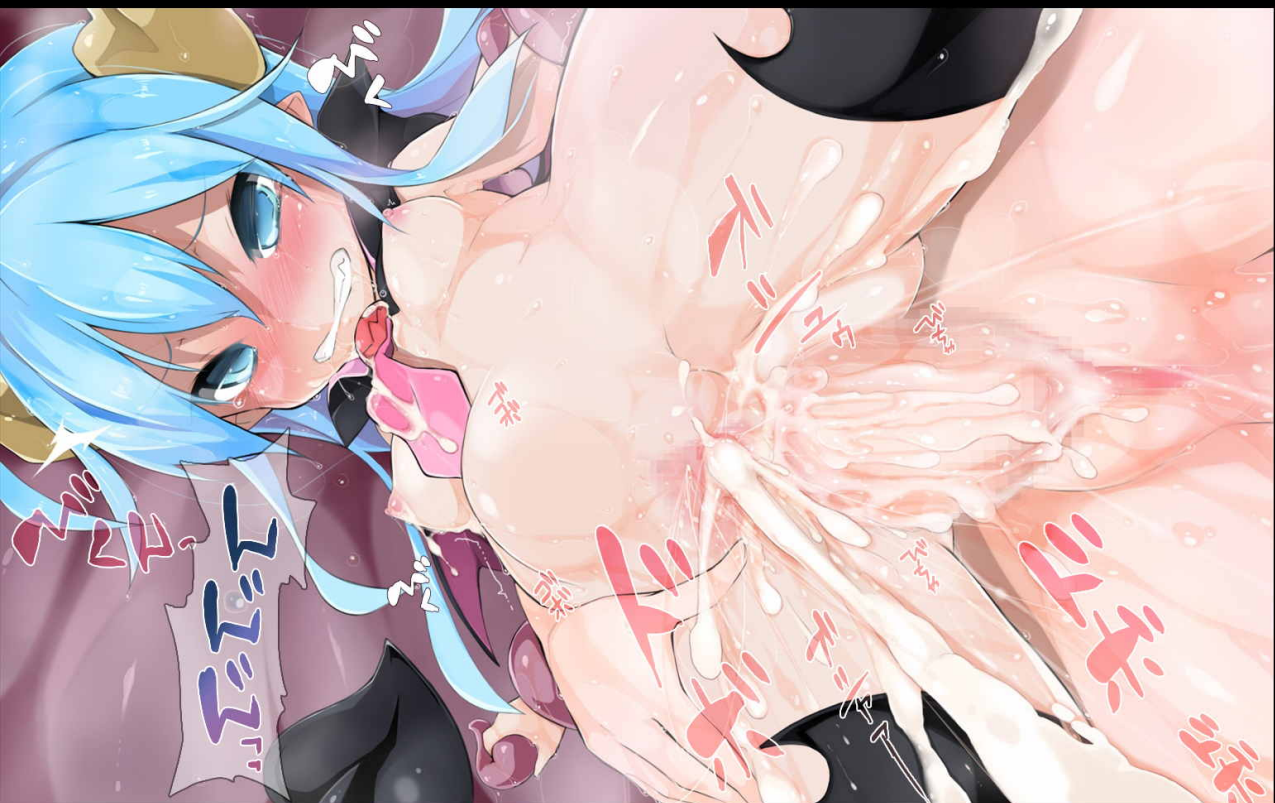
触手に酷く使われた少女の穴は、
奥の子宮口までも緩くさせ

出された精液が溜まることなくポタポタと溢れ落ちていった。

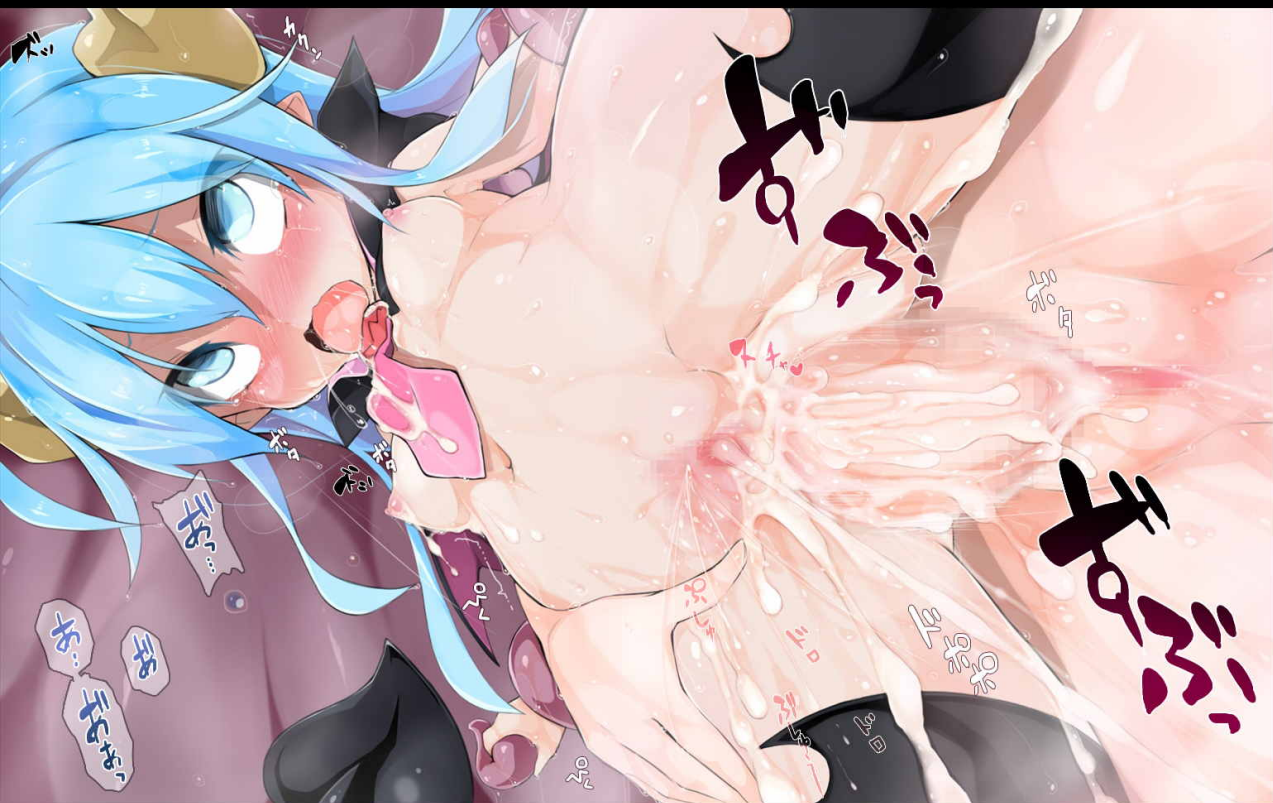
■あは、お姉ちゃん白いおしっこしてるみたい。

姉の壊れた身体が奇行を行い、

妹は楽しそうに笑って見ていた……………。



妹の狂った交尾は、それから数時間止まることなく続いた。
姉はこの数時間で何度も気を失っては目を覚まし、
覚めない悪夢を見ていたことを思い出して絶望する。
量も勢いも弱まらない射精は必ず口から噴き出し、
いつからか少女がえずかなくても
自力で喉から飛び出すようになっていた。





■あ……そうだったお姉ちゃん……ごめんね……
妹が何度目かわからない射精を始めると、ポツリと呟いた。
■いくらお尻の穴に射精したって、赤ちゃんなんて出来ないよね……
気持ち良くて面白くて、つい遊びすぎちゃった……
この数時間、何の目的も無くただ姉を犯して遊んでいたと言う妹。
最後のお尻での射精を終えると、
姉を拘束していた触手たちが外れていった。



拘束していた触手が解かれると
姉は崩れ落ちるようにして倒れこんだ。
妹はお尻の穴からペニスを抜き、まんこに挿入しなおすと
大きく開いた子宮口に向けて一気に突っ込んだ。
■あぁっ……お姉ちゃんのおまんこ……おまんこっ！

久しぶりに味わう姉の膣内は口やアナルよりも遥かに気持ち良く、
本物の交尾をしていると感じさせた。
悦ぶ妹はさらにペニスを太く膨らませ、
膣壁に埋もれながら子宮に亀頭を叩きつける過激な交尾で
すぐに射精をおこなった。



妹は動きを止め、子宮口に強くペニスを押しつきながら
射精の余韻に浸りつつ最後の一滴まで注いでいく。

息も絶え絶えで力なく痙攣する姉。

お腹は重くなり、子宮が押し潰されているのを感じる。

そのまま子宮の口を裂いて

さらに奥へと入って来そうなそれに、姉は脅えた。

はあ、はあ……
これで私とお姉ちゃんの赤ちゃん、
できるかな……？



■ううん、まだわからないよね…もっとしつかり全部奥まで入れて交尾しなきゃダメだよお姉ちゃんっ……!

姉が恐れていた通り、

妹は開いた子宮口に亀頭をねじ込み

その奥を指して押し込みながら腰を突き出した。

下半身を串刺しにされる痛みに、姉の悲鳴が響き渡る。



こうすればっ……！
絶対に赤ちゃん出来るよお姉ちゃん！
子供作るっっ……私たちの子供、
作るっ！お姉ちゃん……！

ドプツと、子宮の中で射精が始まり、お腹の奥に勢いよくぶつかる。ビクリと弾み、息を詰まらせ顔を真っ赤に染めていく姉。

■はあぁ〜…あぁ…っ

よだれを垂らしながら醜くだらけた顔で中出しを堪能する妹は、姉の尻尾を力強く握り締めて引っ張り、ペニスと曲がる程に姉を押し込んでいった。



子作りを目的とした正しい交尾は、子宮の中になつぷりと精液を詰め込むことにより確実に孕むと予感させた。

目的も達成でき、

このまま続けてもせっかく子宮に出した精液が溢れてしまう。

そう感じた妹は名残惜しそうに子宮からペニスを抜き、

交尾を終えようとした。

でも、今のお姉ちゃんの年齢で赤ちゃんって作れるのかな…？

結婚は1600歳からって聞いて、今お姉ちゃん600歳だったよね。



ペニスを浅いとこまで引き再び子宮に向けて打ち込み、
再び抜いてはまた打ち込む。
そう何度も繰り返しながら交尾を続けるうちに、
浅かった姉のまんこに根元までペニスを啜えさせることが
出来るようになった。
妹は幾度も射精を行い、その至高の快楽を満喫した。



■ あっああ——っ！お姉ちゃんが気持ち良すぎて、んんんっ！
おちんぼ止まらないっ……！精液止まらないのおおおっ！

もう十分に性欲を吐き出し切れていたペニス。

しかしこのあまりの気持ち良さに交尾を終わることが出来ず、
空っぽのペニスは無理をして精液を作り、飛ばしていた。

そんな無理が祟ったのか、射精が始まると流れるように精液は出続け、
姉という身体のコップになみなみ注がれていく。



■あはっ……あはあっ！お姉ちゃんっお姉ちゃんんっ！
っ

制御のきかないペニスに構うことなく、妹は交尾を続ける。
次々に湧き出し発射される精液は少女の身体に収まりきらず、
結合部から噴き出し漏れていく。
しかし排出の間に合わない精液はどんどん溜まり、
少女の体内を広げて居場所を作っていた。



——長い長い射精が終わる頃、

姉のお腹は地面に着いてしまうほど中に出された精液で大きく膨らみ、漏れて噴き出した精液に埋もれながらびくびくと痙攣を繰り返していた。

生死を彷徨い、だらしなく開いた口からは舌がたれ、地面を舐める。

かろうじて生きていた姉だったが、

もう瞬きをする力すらも残ってはいなかった…。



身体の水分が無くなりそうなほど射精をし、
肩で深い呼吸をしながら呆ける妹。

しかし姉の膣内が脈打ちペニスを絞めると
何かを思い出してゆっくりと腰を動かし、交尾を再開した。
そして何度も何度も、壊れたペニスは姉の中で射精する。

——そしてそれはとても長く、姉が妹の肉便器として床に伏せ
精液に埋もれ続けてから数え切れないほどの日が経った……。



■お姉ちゃん……ねえ、どうして……？

■っ……あがつ……ああつ……！

姉が肉便器となり自我を無くし始めたある日。
妹は苛立った様子で姉を見下し、触手に力をこめて絞り上げていた。
首は強く引つ張り上げられ、膝が浮いている。

■ぐるし……イ……タス、……テ……！

■助けて……？お姉ちゃん、本気で言ってるの……？



■私を裏切って、こんな事しておいて……！
■あああつつつ——！

口答えをしてくる姉に苛立ちが抑えられなくなり、妹は大きく孕んだ姉のお腹に尻尾を巻きつかせて力いっぱい締め付けた。すると大量の粘り気のある水が少女のまんこから噴き出し、その奥から外に向けて何かが顔を覗かせた。



■おぼっ……！

お腹を絞ると、少女の酷く使われ開いたままの割れ目の奥から触手の卵が飛び出した。

姉は泡を噴きながら、一つ二つと次々に卵を産み落とししていく。

■お姉ちゃんのバカ！バカバカバカバカッ！

なんで……どうして私の赤ちゃん産んでくれないの！

お姉ちゃんは私のモノなのに、どうして触手の卵なんて産んでるのよ！





■私が寝てる間に……毎日触手と交尾して楽しんでたんだ……？
し……してなひ……

■嘘言わないでよ！

じゃあ、どうして毎日交尾してたのに、私の子供を

産んでくれないの！……毎日毎日、私と交尾した後に……

触手の精液飲んで、私の精液を吐き出してたんでしょ！！



姉が自分の子ではなく触手の卵を孕んだ事に
堪えがたい怒りを覚え、
裏切られた悲しみからヒステリックに叫び責める妹。
しかし、便器となつてから妹以外に使われた覚えが無い姉。
必死に誤解を解こうとするが首を絞められ声が出ない。
■してな.....ひ.....っ.....っ.....!



絞め上げられる苦しみから失禁した姉。
気持ち良さそうにおしっこを漏らすその姿を見て、
妹は姉への想いが一気に醒めてしまう。

■そう……お姉ちゃんは私よりも……触手の方が好きなんだね……。

怒りを越え、何も考えられなくなった妹は
吊り上げた姉の身体に無数の触手を伸ばし、襲い掛からせた。



少女の小さな穴に力強くねじ込まれていく触手。
腰が押し上げられ、首を吊るされる苦しみからは解放されるが、
無数の触手が全身に吸い付き身体をなぶり、少女を苦しめた。

■お姉ちゃんのバカ！もう一生、そのまま触手と
交尾してればいいよ！ずっとおまんこで触手啜えてればいいよ！

■ちがっつ——んぶううううううううう！

■ さよなら……お姉ちゃん……。

■ まっで——っ—あがつ……！……っ！

■ いか……ないでっ……！あぐうっ！——！

霞む姉の目に

妹の背中がどんどんと遠く小さくなつていくのが見える。
声を出して引き止めようとするが、
不規則に穴を出入りする触手により少女の声は遮られた。





汚い音を鳴らしながら、触手が一齐に射精を始め
少女のあらゆる穴から精液が噴き出していく。
ホースで水を流し込まれているかのように延々と続けられる射精に、
お腹はすぐに大きく膨れ、入らないそれは外に溢れていた。
小さな身体は奪い合うように右に左にひっばられ、
少女の白い肌がどんどん赤く腫れ上がっていく。



口から飛び出した触手は少女の顔を揺らしながらビチビチと跳ね、ぐっと根元の方で力を込めると、盛大な射精を行った。一際大きく少女の身体が持ち上げられると、再び精液が溢れて噴き出していく。白目を向いた少女の目からは大粒の涙がポロポロと零れ落ち、噴水のように精液を撒き散らしていった。

■んぶっ——っ！んっっ……っ！っ……っ！っ……っ！っ……っ！

1本抜けては新しい1本が突き刺さり、1本が射精を終えると別の1本が射精を始める。

お腹ははち切れそうなほど膨れ上がり、足元には大きな池ができていた。

自らの力では一切身体を動かすことの出来ない少女。

小さく細いその身体は、

太い触手たちに親の敵のように使われ続けた。





しかし、そんなひと時も束の間。
すぐに他の触手が射精を始め、開放された喉を瞬時に精液が上り
口から飛び出し、少女に嘔吐させた。
長く苦しい拷問のような繁殖行為。
まだ始まったたった数分、数えられる程度の触手の処理をただけで
少女の身と心はポロポロになり、死の縁へと追いやられていた。



触手を操っていたはずの妹の姿はもう何処にもない。
それなの動き続け、姉を貪る触手たち。
これが全て魔触虫による母体確保の為の行為だったとは
彼女たちには知る由もなかった。
触手を利用して遊ぶはずだった姉は、いつの間にか逆に利用され
彼らの苗床にされてしまうのだった。



■お姉ちゃんっ！ごめんね……ごめんね……！
初めに魔触虫を妹に使用した時、それは彼女の身体に取り憑いた。抑えきれない性欲を発し、雌を黙らせるための男根に姿を変える。魔力の高い魔族と交配し、生き残るための手段だった。

■私が間違ってた……！お姉ちゃんのおまんこ無しじゃ……私もう生きれないのっ……！おちんちんがずっとずっと疼いて、お姉ちゃん犯したくて我慢できなかつたのっ！



■つ——んああつ！お姉ちゃんっ！私達の子が……！産んだ触手がっ……！
一緒にっお姉ちゃんと交尾したいっ……！
触手は一つの卵から何百本と生まれ、その数を増やしていく。
多くの雌を母体にするのは、それら触手たちを一本でも多く
処理するためだった。
そのため、母体を一匹しか確保できないと言うことになれば、
たったその一匹で何百万本もいる触手の相手をする事になるのだった。

■あはっ……お姉ちゃんすごひっつ……!

あはっ！お姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃん！

少女の小さな穴に無数の触手が次々に啜えさせられていく。
非常に太く長い触手は人型の雌との交尾には適しておらず、
小さな姉の身体は瞬時に貫かれ、触手が口から飛び出した。





■はぁはぁっ……！見てお姉ちゃんっ……私、お姉ちゃんと一緒に
触手の子達に犯されてる……！
お姉ちゃんのおまんこスposスpos犯しながら、ハア……っ
私のおまんこお尻の穴も……っ
お姉ちゃんの産んだ子達に犯されてるのっ……！
嬉しいっ……こんな幸せなことないよお姉ちゃんっっ！
お姉ちゃんも気持ちイイよね……！私のおちんちんキモチイイよね……！

喋る事の出来ない姉にペニスを突きたてながら興奮する妹。

自分の下半身も姉同様に無数の触手に犯され

激しい痛みを伴っていたが、寄生されたその身体は

徐々に触手たちの快樂が自分にも伝わるようになりだしていた。

■あつあつあつあつーなに、これっ…はああつ…！

身体裂けそうなものにつ…！痛いのにきもちいいっ！

お姉ちゃんの全部を味わってる感じがするのぉっ！



■おっ、おっ！……おあっ……！っんぼっ……！

止まらない射精が続くと妹の鼻の穴から精液が漏れ出す。姉同様、出された精液が喉を駆け上がり口に溢れてきた。

妹は目の前の大好きな姉を自らの嘔吐で精液まみれにさせたくなく、必死に口を硬く閉ざして堪えるが、

えずく度に隙間から漏れ姉の顔に垂れ落ちていく。

二人のお腹はどんどん大きく膨らみ、やがて重なり合っていた。



■ おぼっ……ごふ……んんぶうおええ……
■ くぼ……っ……ゴポ……!

射精が終わる頃には妹の意識も薄れ、自然と動いていたはずの腰がその動きを止めていた。口からは吐いても吐いても止まることなく精液が零れ、触手が抜けて開いたままの姉の口の中にドロドロと糸を引きながら落ちていった。



寄生した種馬の身体が疲労のためか重くなり、動かせなくなる魔触虫。彼は交尾を再開させようと、妹のお尻に大きな触手を突き刺した。

■ んひっっ

ビクリと反応して飛び起きる妹。

挿入された触手は強くお尻に吸い付き、

妹の身体を前後に引っ張るようにして動かし

固定された姉のまんこにペニスを出し挿れさせて交尾を続けた。



穴に触手が馴染みはじめると、動かすペースがどんどん上がっていく。
勝手に身体を動かされ、姉と強引に交尾をさせられている自分に
この上ない興奮を覚える妹。

■おっ！……おっ！……おっ！……おっ！……おっ！……おっ！……おっ！……

無理矢理交尾をさせられているうちに、

押し込む度に体内に深く突き刺さっていった触手が
妹の口からずると飛び出した。



自分のお尻から入って口から出た触手が、姉の口の中に入り喉を犯している。そのあまりの光景にゾクゾクと興奮が高まる妹。膨れ上がったペニスは何度も姉の中で射精を行い、同時に姉の喉奥でも触手による射精が行われた。

興奮のあまり、いつの間にか疲れも忘れて自分の意思で腰を動かして再び姉を犯す妹。潰す勢いでのかかり、重なり合うお腹が押し潰され二人の穴からは大量の精液が音を立てて飛び出していった。



数時間、

無我夢中に交尾を楽しんだ妹は再び疲れ果て、腰を止める。

魔触虫も全てを出し終えたのか、

妹のお尻から挿入した部分だけを残して離れていた。

太い触手を啜え合ったままの姉妹。

潰される姉は苦しみにもがく事も出来ず、僅かにできる呼吸をただ行う。
妹は執拗に姉と乳首を擦り合せ、余韻を楽しんだ。



魔触虫が交尾を終えるのを見届けると

触手たちが一齐に飛び掛り、二人の奥へと侵入し詰まっていた。

■ んんんんんんんっっっ——っ！

■ つ——

中をえぐりながらほじくられて掻き回され、

1本ですら苦しい少女たちの穴に隙間なく次々と

詰め込まれていった触手は、乱暴に中で暴れまわり交尾を楽しむ。





数十本の触手が射精を終えて抜け出すと、
また新しい数十本の触手が挿入される。
延々と繰り返されるその行為に終わりはなく、
全ての触手と交尾を終える頃には丸二日も日が経っていた。
初めに処理した触手たちはすっかり元気を取り戻し、
再び順が回って来ると、久しぶりに味わう姉妹の肉体を楽しんだ。

その後、触手の苗床と成り果てた姉妹は
二度と人目につくことはなく、

精液に埋もれながら置物のように裸で抱き合い一生を過ごした。

■おねえ…ちゃん…ごめ、ん…ね……

だい、じょうぶ……。やっど……。やっど触手抜けたから……

もう……だいじょうぶ……。う





■あつ…、あはつ…！お姉ちゃん…おねえちゃん…！
やつと…！やつと私の番がきたよ…！つお姉ちゃんを犯す番…！
私のおちんちんもキモチ良くしておねえちゃん！
あああつ！だいきつ、お姉ちゃんだいきつ！
お姉ちゃんっ！お姉ちゃんお姉ちゃんおねえちゃんおねえちゃんおねえちゃん
何故こうなつてしまったのかはわからない。それでも大好きな姉を
好きなだけ犯せる毎日に満足し、妹はいつまでも幸せに暮らした…。